

日韓発掘交流に参加して

2016年10月10日から12月2日まで、日韓発掘交流事業により、韓国の国立慶州文化財研究所に滞在し、発掘調査に参加しました。奈良文化財研究所と慶州文化財研究所は、2005年から双方の研究員が互いの研究所に約2ヶ月間滞在し、実際の調査に参加するという交流を継続的におこなってきました。

私は今回、新羅(三国時代～統一新羅時代)の王宮遺跡として知られる月城の発掘調査と、5世紀の新羅の墓域である、チョクセム古墳群の分布調査に参加しました。月城では、^{ヘジャ}垓子と呼ばれる濠状遺構の調査をおこないました。垓子は5つの単位に区分されていますが、2015年から1～3号を発掘しています。一つの垓子の規模は、長さ100m以上、幅は最大40mにも達する巨大なものです。ここの分層作業を担当しました。また、チョクセム古墳群では、古墳の構築方法を知るための断割調査に携わりました。

調査では、規模の巨大さや遺構密度の高さゆえに土層の理解が難しく、大いに悩まされました。そのような中で、韓国の研究者と拙い韓国語で意思疎通をはかり、時には絵をスケッチブックや地面に描きながら、遺構の理解や調査の方法をめぐって議論できたことは貴重な経験でしたし、何より彼らが私の拙い会話能力を気にせずに接してくれたことで、より一層刺激的な調査になりました。

滞在中、慶州文化財研究所の研究員の皆さんには、公私ともに助けていただきました。おかげで資料調査では韓国中を回ることができ、夜にはお酒を酌み交わして他愛もない会話で打ち解けあうことができました。こうしたことができたのも、これまで双方の先輩方が培ってきた絆があったからこそだと感じています。今後も、両研究所の交流が末永く続くことを望みます。(都城発掘調査部 芝 康次郎)



月城垓子で分層する筆者